# 日常生活史 —— B女の場合

## 「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」(その二)

宝 福 則 子

### はじめに

本稿は,「人文研究」第91輯に続く,「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析法方等については,第91輯を参照されたい。

当該資料は,1980年3月28日に被インタビュアーのブラウンシュヴァイク・シュテックハイムの自宅における,4時間にわたるインタビューを,A4タイプ用紙105ページに書き起こしたものである。インタビュー途中で配偶者が帰宅し,途中からインタビューに加わったので,彼の日付データ等に関する発言も考慮した。ここで,参考のため,まずB女の略歴と両親について簡単に記しておく。

1909年10月9日　ブラウンシュヴァイクで誕生
1923年—1926年　家事見習い
1926年—1930年　ブリキ工場や缶詰工場における未熟練工場労働者
所属団体等
1925年—1929年　山歩きのクラブ
1926年—1933年　ドイツ金属労働者連盟
1927年—1933年　自転車愛好家協会「連帯」
1930年頃より　社会民主党 *SPD*
1929年　家具職人の最初の夫と結婚,1930年に男子を生む

1945年10月11日　夫が首つり自殺

1953年6月18日　2度目の夫とブラウンシュヴァイクのシュテックハイムで再婚

1961年より専業主婦

父　1889年にヴォルフェンビュッテルで誕生し，1968年にブラウンシュヴァイクの病院で死亡。

職業は，窓拭きなどの単純労働者として出発後，様々な仕事に従事1915年か16年に独立し，窓拭きの自営業者となる。1919年より，帝国鉄道に勤務。

所属団体等

1915年か16年まで，ドイツ工場・農業・未熟練男女労働者連盟 *Verband der Fabrik-, Land-, Hilfsarbeiter und arbeiterinnen Deutschlands*

1919年より，ドイツ鉄道労働者連盟／ドイツ鉄道員統一連盟 *der Deutsche Eisenbahner-Verband／Einheitsverband der Eisenbahner Deutschlands*，演劇協会 *Theaterverein*

母　1890年にブラウンシュヴァイクで誕生し，1964年に同地の病院で死亡。

職業は，未組織の未熟練工場労働者。子供の誕生後は，1920年か21年より30年代初頭まで新聞配達。

8回の出産（内，双生児出産2回）と5回の流産を経験。

## 1．両親について

私の両親は学校時代に知り合い，1911年9月24日にブラウンシュヴァイクで結婚しました。私が生まれてすぐに結婚しましたが，私は法律上は，両親の私生児として生まれました。父は，母と結婚できないくらいなら，他の女とは結婚しないと言っていたということです。教会の結婚式は挙げていません。私の母は，未婚で私を生みましたが，父といつも一緒に住んでいまし

たから，嫌な思いはしていませんが，隣近所の噂話の種にはなったそうです。両親がすぐに結婚できなかった理由は，両親の母親同士が，お互い我慢できないほどに，仲が悪く，結婚を許されなかったからでした。どちらの親も，当時まだ純粋に労働者の居住地域だった，マウワーン通り *Mauernstraße* に住んでいました。今のマウワーン通りとは比較になりません。母方の祖母は，土地を2区画所有していました。彼女は，母が，ただの労働者よりも良い職業についている男と結婚することを望んでいたので，父は，婿として不満足だったのです。それで，両方の母親は，お互いに怒り狂い，戦争状態になったというわけです。その結果，母は妊娠すると即刻，家を追い出されました。母は，父と同居するまで，あちこち転々と移り住みました。両親は，お金がなかったので，すぐには同居できなかったのです。あの頃は，今時の若い人のように「今日，結婚します。車を買います。そしてすぐに大きな住居に住みます」というわけにはいかなかったからです。両親が，最初に同居した所は知りませんが，ツェラー通り *Celler Straße* に住んでいる時に，私を病院で生みました。私は，生後すぐに新教の洗礼を受けています。その後，母は父と正式に結婚して，ランゲ通り *Lange Straße* 10番のアパートに落ちつきました。

母は，麻の紡績工場や，クヴェルナー缶詰工場等で働きました。他にどこの工場で働いたのかは知りませんが，とにかく，仕事なら何でもしたということです。子供ができてからは，新聞配達をしました。朝は『ランデスツァイトゥンク』"*Landeszeitung*"，昼には『アルゲマイナー・ツァイトゥンク』"*Allgemeiner Zeitung*"，午後には『ディ・ノイエステン・ナッハリヒテン』"*Die Neuesten Nachrichten*" を配達しました。最後は『アルゲマイナー・ツァイトゥンク』のみでした。弟たちが見習いの職を得て，家を出たので，配達の手伝いがいなくなり，又，父が線路工事マイスターになった時点で，父が新聞配達をやめさせたのです。

私の母は，子供の頃，登校前に，パンの配達をしたということです。彼女が子供の頃は，もっと大変な時代だったのでしょう。その頃は，子供たちは，

親と一緒に何らかの仕事をしなければならなかったということです。彼女の場合は，パンの配達だったわけですが，朝の5時から始めて，その後に，学校へ行ったのです。それでも，母は，クラスで一番の生徒でした。母の先生が，私が結婚してからも私の両親の家に訪ねてきたものです。私も同じ先生の生徒でした。私の母や叔母さんたちと同じ先生だったというわけです。

## 2．弟たちについて

私は，両親の長女で，弟が4人，生き残りました。その他に，私のすぐ下に1910年に弟が生まれましたが，生後すぐに未熟児で生まれて，亡くなりました。その次に，男の子と女の子の双生児が1912年8月に生まれましたが，生後1年以内に百日咳で亡くなりました。またさらに1913年8月12日に男の子の双生児が早産で生まれ，生後すぐに亡くなりました。当時のドイツでは，とくに，労働者の家庭では幼児死亡率がとても高かったのです。衛生状態はそれほど良くなかったし，医者の費用をまかなったり，食事さえも満足にできなかったし，何もなかったのです。どの子もブラウンシュヴァイクで生まれています。亡くなった弟たちや妹の名前は，すべてわかりません。

その後に，生き残った弟たちが生まれたのです。ハンスが1914年8月15日，次のクルトが1915年8月9日，その次のハインツが1918年6月13日，末のヴァルデマーが1919年12月16日に生まれました。ハインツとヴァルデマーだけが，まだ生きています。クルトは1979年の聖夜に，肺癌のために64歳で亡くなりましたが，彼は1日に70本から80本もタバコを吸っていました。ハンスは1952年か53年に首をつって，亡くなりました。生き残った弟たちは，みな結婚しました。

私の後に，ハインツも出征することになって，戦争中に結婚しましたが，彼が戦争に行っている間に，妻が馬鹿なことをして，離婚しました。彼は，捕虜になり，やっと1948年に帰還しました。ハンスは，戦争前の1932年から34年頃に結婚しました。クルトは，3度も結婚しました。最初の時も，彼のどの結婚の時期も，覚えていません。

弟達の職業は，ハンスが自動車整備工，クルトは旋盤工，ハインツが木工建具職人，ヴァルディマーがオフセット印刷工で，みんなブラウンシュヴァイクで働いていました。現在は，皆，年金生活者です。ヴァルディマーは早期年金受給者です。クルトもですが，彼は，もう1年残して，今年，早期年金受給者になりました。

弟たちの妻の職業についてですが，ハインツの最初の妻は工場労働者でした。今の2番目の妻は，カールシュタット・デパートの売り子です。クルトの今の妻は印刷工です。最初の妻は専業主婦でしたが，離婚後に郵便局へ働きに出ました。結婚前に働いていたかどうかはわかりません。2番目の妻には会ったことがないので，わかりません。ヴァルディマーの妻は，陶器・ガラス器の売り子の職業教育を修めて，卸売り業で働きました。

私は，弟たちの中では，末の弟のヴァルディマーが一番好きです。一番好きでないのは，クルトです。彼は一家の嫌われ者でした。彼はいつも私たちのすることを嗅ぎ回って，私たちが何を食べてしまったか，言いつけたりしたものです。両親は，金曜日毎に，買い物に行くと，いつも私たちにアメを一袋買ってきてくれました。私たちは，それを公平に分けるのですが，一つ余分に残ると，いつも彼がとったものです。そして，自分の分を早く食べてしまっては，私たちのアメをねだり，「お前がやったことを，絶対にお母さんに言いつけるぞ。言いつけるからな」と私たちを脅したものです。実際には言いつけませんでしたが，私たちがアメを与えるまで，言い続けるのですから，みんな彼にとても腹をたてました。それに，食事時に，私の脚を蹴っておいて，「あー，あー，お父さん，お姉ちゃんがまた足を蹴ったよ」と大嘘を言って，叫ぶのです。馬鹿な子でしたよ。ある時，私が家に帰る途中，学校帰りの彼に出会いました。腕を下に下げたままなので，わけをきくと，「腕を動かすことができないよ」と言うのです。それで，彼を自転車の荷台に乗せて帰りました。母が，「一体，どうしたんだい。すぐに横になりなさい」と言い，彼が寝ると，その脇にチョコレートを置いたものです。そして，私たちが台所へ入って，「本当にあの子が腕を動かせないのかどうか，見てみたいの

さ」と母が言ってる間に，彼はチョコレートをさっと取ったのですよ。その日，学校で聞き取りを書かせられたのですが，良く書けなかったので，腕が動かないと嘘を言い，先生がそれを信じて，彼を家に帰したというわけです。まったくもう，いい役者でした。それに類したことが，たくさんあったのです。食事の時に，母はまだ外にいました。私たちはグリースのスープを食べていました。一番上の弟が私にいいがかりをつけて，喧嘩になり，私がスプーンを投げつけると，丁度，そこに掛かっていた，両親の大きな写真の額縁のガラスを壊してしまいました。そこで，「もし，言いつけたら，ただでおかないよ」「いいや，言いつけないよ。言いつけないとも」。両親は，何もそれについて糺しませんでした。母は，その日，この写真の額を拭いたので，自分が壊したと思ってしまったのです。誰も母に言いつけなかったのに，クルトが「お前が壊したって言ってやる。お前が壊したんだって言ってやる」と言い始めたのです。そんなわけで，私は，いつも，彼に取られてしまったので，アメやチョコレートをまったく口にできませんでした。

### 3．祖父母について

母方の家族は，曾祖父母の代からのブラウンシュヴァイク人ですが，祖父は，私が生まれた時には，もう亡くなっていました。父方の祖父は，生きている間中，働いていました。私たちが，ザルツダールマー通り *Salzdahlumer Straße* に住んでいた時，私たちの家の薪用の木を切ってくれたり，何でもしたものですが，私が16歳か17歳の時に亡くなりました。この祖父も祖母達も，何歳まで生きていたのかはわかりませんが，多分，60歳台だったでしょう。70歳にはなっていなかったはずです。父は，ヴォルフェンビュッテルの出身ですが，子供時代にブラウンシュヴァイクに出てきましたから，皆，ブラウンシュヴァイクで亡くなりました。

父方の祖父母は，ハルツ地方のホッホガイスやベネッケンシュタインの出身です。この祖父の両親，つまり曾祖父母は手作りの針を造る鍛冶屋を営んでいました。冬は，そこで針を作り，夏になると，馬車に品物を積んで町へ

やって来て，売ったのです。曾祖父は，町で品物を売ったお金のかなりの部分を飲んでしまいました。その上，いつも馬や荷車など，何かを町に置きざりにしてしまい，それで鍛冶屋をつぶしてしまいました。そのために，祖父母がこの近くのヴォルフェンビュッテルに越してきて，私の父もそこで生まれたのです。父方の祖母は，ずっとクヴェルナー缶詰工場で働いていたと思います。

母方の祖父は文盲だったと両親に聞いていますが，労働者でした。母方の祖母は，瓶ビールなどを売る小さな店を持ってました。居間兼台所に戸棚があって，その中にタバコなど何でも入っていました。ビール瓶は，外に置いていました。それで生計を立てていたのです。小商人といえばよいのでしょうか。しばしば想い出すのは，彼女がいつも鎖に付けた鍵を持っていて，それでいちいち戸棚を開けると，私たちが中に置いてある物に触らないように，すぐに閉めていたことです。私達は，父の教育がきびしかったから，そんな物をとろうと思ったこともないのですけれど。子供達のだれかが，物を盗んだりしようものなら，父は死ぬほど殴ったことでしょう。私とちがって，男の子たちは，ずいぶん殴られたものです。

## 4．両親の家の住居

母が，あちこちを転々とした後，両親は，ランゲ通りに落ちつきました。ここには，私が7歳になるまで住んでいて，私はここで，1915年に，小学校に入学しました。このアパートは，2部屋の住居で，とても素敵でした。まず，階段を上がってくると，大きな台所があって，その後ろに居間があり，さらにその奥に大きな部屋がありました。ここで，皆，一緒に寝ました。トイレは，中庭にありましたが，これは，水洗ではなく，ポチャーンと音のする，汲み取り式のトイレです。台所から直接，上の屋根裏部屋へ行くようになっていました。この屋根裏部屋は，物干しや物置き場でした。物置き用の地下室もありました。このアパートの住居には，両親，私，弟のハンスとクルトで住みました。その間にまだ他の子供も生まれたのですが，皆，死んで

しまいました。考えられないことですが，母は，1年以内に2回も双生児を生んでいます。1度目は8月15日，2度目は8月9日でした。この双生児たちも，亡くなりました。このアパートの住居には，又貸しの間借り人は，置いていませんでした。私たち家族だけで住みました。

次に，クプファーヴェーテ *Kupferwete* の3番にある3部屋の住居に越し，1919年まで，そこに住みました。この家には，地下室はありましたが，屋根裏の物干し部屋はなく，その代わりにテラスがありました。ここでも，トイレは汲み取り式で，中庭にありました。当時，街中の家では，どこもそうでした。私たちの住居には，専用の廊下はありませんでした。階段の踊り場から上がっていくと，手すりがあって，そこにいくつかの各戸用のドアがありました。同じ階の端には，もう1家族が住んでいて，私たちは反対側の端に住んでいたのです。ここで18年にハインツ，19年にヴァルディが生まれ，生き残った子供だけでも5人になりました。ここでも，又貸しの間借り人も親戚も同居しませんでした。

1920年1月に，ここからザルツダールマー通り *Salzdahlumer Straße* の77番に越しました。この引っ越しの時，私はヴァルディを乳母車に乗せて行きました。この住居は，鉄道官舎でした。父が，その間に窓拭きの仕事をやめて，鉄道に移ったからです。線路工事作業員になったのです。一生懸命働いて，まず線路工事作業副班長になり，班長，マイスターとなり，最後に線路工事作業マイスター長で退職しました。彼は，絶えず努力したので，鉄道官舎に住めたのです。場所は，鉄道線路のすぐ後ろの右側です。今のベーベルホーフ *Bebelhof* の前，鉄道線路に沿ったボルジング通り *Borsingstraße* です。この官舎は，2家族用の一戸建てでした。住居はとても大きくて，居間，寝室がふたつ，上の階にさらに3室あって，弟たちが使いました。全部で6室もあって，とても素敵な住居だったのです。これはきちんとした一戸建ての家でしたから，外から入って，自分たちの住居のドアへ曲がる前に，トイレがありました。ここでは，もう家の中に水洗のトイレがあり，下水道もありましたが，まだ住居の中に風呂はありませんでした。地下に亜鉛板のバス

タブが入れられました。住居の中に，自分たち専用の廊下もありましたが，物置部屋はありませんでした。ここで，家族7人が暮らしたのですが，この鉄道官舎は壊されてしまいました。

そのために，28年から29年にかけての冬は，とても寒かったのですが，真冬の29年1月1日に，リッダグスハウゼン *Riddagshausen* のブロードヴェーク *Brodweg* に越しました。道は凍ってつるつるで，たくさん雪がありました。ブロードヴェークに越したときに，初めて自分の部屋をもてました。私は，自分の部屋があるということが，とても自慢でした。その前の住居では，上の2人の弟と一緒の部屋で寝ていました。弟たちは，一つのベッドに一緒に寝て，私は反対側に置いてある，別のベッドに一人で寝ていたのです。下の2人の弟たちは，両親の部屋で，両親のベッドに一緒に寝ていました。それでも，両親は，まだ子供を作ったのですよ。私は結婚したので，ブロードヴェークには1年も住んでいません。

私が物心ついた時に住んでいた，ランゲ通りは，純粋に労働者家族の居住地域でした。つまり，ほとんど労働者だけが住んでいたのです。今はもう，この辺りも，まったく様変わりしてしまいました。今，ランゲ通りには，新しい家が建っていて，当時の私たちの家は残っていません。その家は，4階建ての幅の広い家で，通りに面した前側半分に全部で6家族が住んでいて，この前側の脇に建物がありました。ここが，私たちの住居でした。地下に洗濯部屋と物置がありました。私たちの住居の上には，2戸分の住居がありました。下には母の友達が住んでいました。奥にも建物があって，どの住居からも隣が見えたものです。素晴らしい庭もありました。夏になり，太陽の光が射すと，とてもきれいで，窓からは，いつも庭の緑が見えました。当時，ブラウンシュヴァイクには，こういった脇や奥側に別棟の建物のある家が多かったのです。この家は，良く手入れされていて，私がこれまでに住んだいろいろな家の中でも，一番素敵な家のひとつなのですが，再開発計画によって，この奥の建物が取り壊されました。この家は，弁護士のカブス *Kabus* の

家作でした。私はまだ子供でしたが，封筒に入れて渡された家賃を，この弁護士に届けに行かされたものです。カブスは，ウィルヘルム通り *Wilhelmstraße* に住んでいました。この大家が，家の手入れにうるさくて，いろいろ修理させられました。

ランゲ通りには，荒れ果てた家がたくさんありました。たとえば，向かいの66番辺りの家も，とても荒れていました。その数軒先に新しくて，見栄えの良い家があったりしましたけれども。1番から10番までと12番の家は，とても良く手入れがいきとどいていました。これらの家には住める状態でしたが，他の家の状態はひどいものでした。だから，いつも「ランゲ通り，クリント *Klint*，ヴェルダー *Werder* の住人は，ドイツを堕落させる一番の困り者だ」と言われたものです。私達のような，そこの住人は，本当にそうかどうかはともかくとして，後ろ指を差されました。

クリントの住人が一番悪い評判をとっていましたが，そこには，労働者だけが住んでいて，一番古い家並みで，一番みすぼらしく見えたからです。家賃も一番安かったので，労働者が入居していたのです。経済的に一番困っていて，子供も多いと，他の地域の住居には入れなかったのです。

ヌスベルク通り *Nußbergstraße* やユリウス通り *Juliusstraße* は，公務員などの中産階級の居住地域でした。労働者もたくさん住んではいましたが，先に話したランゲ通りやクリント，ヴェルダーに比べて，どの家も，造りがずっと良かったのです。熟練工，つまり技能工と未熟練工では，住む家もちがいました。技能工の住居の家賃は，少し高めでした。技能工の方が稼ぎが良かったし，だからいくらか高い住居に住めました。ユリウス通りやフィルチョフ通り *Virchowstraße* のような通りに労働者が住んでいたということで，この地域は比較的良い方の労働者居住地域といえます。この地域には，社会民主主義者が多かったのですが，ここの労働者の住人たちは，私たち一般の労働者から離れていきました。労働組合や党のメンバーは，少なくとも60%から70%が技能工だった，と私は言いたいです。労働者政党とはいえ，技能工の政党です。

しばしば，当時のことを，古き良き「ウィルヘルム時代」と言いますが，そんなことはありません。住居にしても，廊下などなく，住居の戸を開けると，すぐに台所で，台所から居間，居間から寝室へと，直接に続いているような造りでした。今の若い人たちに，当時の生活を知ってもらうことは大事だと思います。唯一，私がとても良かったと思い，口に出すことは，ここの大公妃が年寄りや貧しい者に慈善を行う人だったということです。私が直接見たということを強調しておきたいのですが，私の家の向かいの娘が結婚した時，大公妃が馬車で労働者居住地域にやって来ました。そこで，結婚式の目印の花飾りを見つけて，花婿と花嫁を自分の馬車まで来させました。二人が来た時，その手に何かを握らせて，お祝いを言って，又，馬車で立ち去りました。この目で見たのです。母は，出産すると，いつもカードをもらいました。そうすると，私達のうちの誰かが，お城の台所に行きます。そこで，食事をもらうのです。多分，戸籍役場で母の出産を知ったのでしょう。母は，戦争中に4人の男の子を生んでいますが，大公妃も同じなので，母を優遇して，昼食をくれたのだと思います。その昼食は，まったく素晴らしい食事でした。私たちは，運搬用の特別な道具を渡されており，私が，しばしば，お城の台所へ食事をもらいに行きました。

## 5．学校

私は6歳で，まずブラウンシュヴァイクの街中のマッシュ通り *Maschstraße* の国民小学校に入学し，19年か20年に町のはずれへ引っ越したので，そこのレオナルド通り *Leonardstraße* の小学校に転校し，1923年に卒業しました。

両親にとっては，経済的に大変な時代でした。私も，子供ながら，我慢しなければならないことが，たくさんありました。たとえば，学校の遠足のために50ペニッヒ必要な時には，私はいつも「私も遠足に行けるかしら」と尋ねます。答えは「いいや，お前は行けない」でした。お金がなかったので，他の子供たちは，遠足に行けて，私は行ってはいけないというのです。でも，

親が学校の先生にそのことを言うと，一緒に遠足に連れていってもらえました。ノートを必要なときは，10ペニッヒ必要です。そうすると，親は「お金がないから，お前の先生に言いなさい。そうしたら，先生がただでノートをくれるから」と言うのです。両親は，私が教材をただでもらえるように，頼んでいたのです。私は，いつもノートのために，まず戦わなければなりませんでした。当時は，教材の無償支給はあったのですが，そのためには特別な申請が必要で，簡単なことではありませんでした。「母は，子供たちに食べさせなければならないから，教材が買えない」と先生に言えというので，そう言ったのですが，「あなたのお母さんは，そんなにたくさんの子供を作るべきでない」と先生が答えました。それを聞いた母は，もちろん，とても怒りました。

私は，学校で体操も一緒にできませんでした。体操用に必要な衣類を持っていなかったのです。体操用のパンツなど贅沢だから，必要ないと言われて，買ってもらえませんでした。男の子たちが体操するには，普段着のままで足りますけど。私が体操の時間にできる唯一のことは，そこいら辺を走り回ることだけでした。それだと，体操用の衣類などを用意しなくともよかったからです。走る時は，靴をはいてはいましたが，それさえも用意するのは，大変な品物でした。

学校では，たった一度だけ，先生に殴られたことがあります。先生が短気を起こして，少し，おかしかったのですよ。国語の時間に，私が下手な字を書いたのです。ちょうど，私の後ろに立って，それを見た先生が，私の頭を椅子に向けて殴ったので，私は鼻血を出しました。私は立ち上がって教室を出て，いちもくさんに家に走り帰りました。私が殴られたのは，この時，たった一度だけです。先生たちが，私を殴る理由などありませんでしたから。他の生徒たちも，本当に悪さをしたら，定規で手を叩かれましたけれど，殴られませんでした。私たちのクラスは，いつも女の子だけで，男の子はいませんでしたから，殴られるということはなかったのです。

## 6．子供時代の労働と遊び

子供時代には，お金を稼ぐために働いたことはありません。弟たちは，小遣い稼ぎをしましたが，自由意思で働いたのです。とはいえ，私は，家事をしなければなりませんでした。床磨き，食事の用意などの家事全般です。まだ学校に行く前の5歳頃から，結婚する20歳まで，いつも家事をしていました。家の中の主な仕事は，私がしなければならなかったのです。母は，ベッドを整えたりしましたが，3つの新聞配達の仕事で精一杯でしたから，私が埃払いや拭き掃除などもしました。新聞の集金も大変でした。そんなわけで，実際的に，私は主婦でした。だから，もう，たくさんの家事を覚えました。

私の12歳の誕生日のことは，絶対に忘れられません。その日，母は，すぐに出かけなければならないのに，あれもこれもやっておかなくてはならないので，とてもあわてていました。だれも，私の誕生日だということに気がつかず，だれも，私にお祝いを言ってはくれませんでした。その上，私に，学校へ行く前に，地下室からじゃがいもを持ってこいと言うのです。それで，私は「いつだって，いつだって，私なんだから」と不平を言いました。私の一番上の弟だって，もう十分にその仕事をできる年頃だったからです。すかさず，パシッとぶたれました。「これが私の12歳の誕生日なんだわ」と言ったら，母が「あー，あー。ハンス，ここに1マルクあるから，行って，花の鉢植えを買っておいで」と言いました。このことは，生涯忘れられません。母は，私の誕生日だということを考えもしなかったし，父も，知らずに，もう仕事に行っていました。そうしてハンスが，上に花が二つついている，大きな枝を持ってきました。そこで，私は「私の12歳の誕生日に私のやさしい両親から」と自分でカードを書いて，これを私の部屋の窓のところに置きました。これでわかると思いますが，母は，本当に仕事に追いまくられていたのです。今の私なら，子供の時のようには腹をたてません。

ほんとうに，子供時代には，もっと遊ぶ時間がほしかったものです。いつも遊ぶ時間を闘い取らなければ，遊べなかったのですから，本当に，精神的

につらい思いをしました。遊びに出る時は，いつも小さい弟の乳母車を押していましたから，他の子供たちが遊んでいる間，乳母車に注意していなければならなかったのです。いつも通りで遊びましたが，家の中でも遊びました。中庭でも遊びましたが，最後に住んだブロードヴェークの家には中庭はありませんでした。

子供時代，とても仲の良い女の子がいました。いつもこの子と遊んでいました。この子とは，学校も一緒でした。遊びといっても，木に登って，サクランボを盗んだり，たわいのないものですが，木から落ちて，罰が当たったことがあります。

弟達は，母の新聞配達や，集金も手伝いました。彼らは，学校から帰ると，母を迎えに行って，一緒に新聞を配達しました。母が嫌がったので，朝は配達の手伝いはしませんでした。その代わりに，父が仕事に出かける前に，配達を手伝い，そのまま仕事場に直行したのです。父が，子供たちを登校前に働かさないようにしたのです。私たち子供は，登校前は，だれも働くことはありませんでした。朝刊は，朝4時からの配達なので，私がまだ寝ている時に，両親はお金を稼いでいたのですよ。私たちが起きる頃，母が家に戻り，学校に行く支度をしてくれました。私たちが学校へ行くと，母はまた出かける支度をして，アルゲマイナー・アンツァイガー社へ行き，そこの300部の新聞を私たちの住んでいる地区で配達したのです。これは，3年間続き，その後に，『ディ・ノイエステン・ナッハリヒテン』の配達が加わったのです。一日に，三紙の配達をしたわけです。それに家事や他の用事もありましたから，大変だったのです。

上のふたりの弟たちは，配達の手伝いのほかに，ケーゲル（：ドイツのレストラン等に併設されている小型のボーリング）の瓶を立てる手伝いをして，小遣い稼ぎをし，それを貯めておいて衣類などを買いましたから，家計の足しになりました。

## 7．職業

私は，職業教育は受けていませんが，今のレッシング広場 *Lessingplatz*，当時のジーゲス広場 *Siegesplatz* 3番のフォン・アルテン博士の家で家事見習いをし，料理を習いました。小間使とはちがいます，家政婦の見習いだったのです。月に8マルクのお小遣い程度の給金をもらい，1926年まで3年間，正確には，2年と9カ月，見習いを続けました。これは強制されたからではありません。厭なら，1年でやめてもよかったのですが，私は，家事をしっかりと身につけるために，気の済むまでその家にいました。

家政婦見習いの間は，両親の家に住んでいました。奉公先で食事をして，家で寝ていたのです。だから，年寄りのやさしい婦人が主人で，私にいろいろなことを教えてくれましたが，家に帰ると，また家の家事をしました。でも，その間に繕い物や他の手仕事を家に持って帰るようになり，あまり家の仕事を手伝えなくなりました。

父は，いつも「お前は，もうそこの家をやめて結婚し，男の子たちは，しっかりした職を身につけるのだ」と言いました。私が，どんな家事もできるようになったら，もうそれ以上は必要ない，つまり，結婚の準備はできたというのが，彼の考えだったようです。みんなが手に職をつけることができたというわけではありません。私は，本当は裁縫師になりたかったのですが，その見習い修行はできませんでした。父は，労働者で5人の子供たちを養わなければならなかったからです。それは，当時，とても大変なことでした。

その後，私は，もっとお金を稼ぎたくて，工場に行きました。家事見習いでは，あまりに給金が少なすぎて，やりくりできなかったからです。私は，ブラウンシュヴァイク・ブリキ会社に，二回にわたり勤めました。一度目は1926年から1930年までででしが，たくさん稼げました。最初の時給は38ペニヒでした。この工場では，はんだ付け，金属板の打ち抜き加工，ふた付け作業などの仕事をすべてしました。私は特別な部門にいて，すべての仕事に使われたのです。女性なので，男の労働者よりも少ない賃金でした。どっちみ

ちそうだったのですよ。例えば，私は溶接をしました。私の時給は65ペニヒでしたが，男の労働者は同じ仕事で，もっとたくさんの賃金をもらいました。私たちは，いつも男の労働者よりも少ない賃金でした。いつもです，基本賃金がです。私たちは，そんなものだと思って，特別に考えはしませんでした。本当に何も考えなかったのです。不当だという考えが，思い浮かばなかったのです。もっと良い賃金で，もっと多くのお金をもらいたい，という考えに至っていたら，と今になって思います。私は，出来高給で，いくらか多く稼ぎ，出来高でできるだけ一番になってやろうとしていました。個人的な努力で，高い出来高給をもらうことはできたのです。でも，あまり多すぎてもだめだったのです。あまり多くなりすぎると，新しい決まりができて，また少なくされてしまうのでした。工場で働くようになっても，時間の許す限り，家事を手伝わないわけにはいきませんでした。洗濯の日なども手伝いました。

1930年に男の子を生んだので，一時期，家にいました。そして，この家を建てた時に，またリーム社へ行って，家計の足しに，少しばかりのお金を稼ぎました。私は，いつも何らかの仕事について，働いていました。でも，自分のやりたい仕事を選んでというわけではなくて，仕事があれば何でもしたということです。最後は，ニットウェアの戸別訪問販売員として，セーター，スカート，ブラウスなどを売り歩きました。つまり，私たち販売員は，車に乗せられて町を出て行き，ある地域で車を降ろされるのです。でも，その地域はいつも同じところでしたから，お客もいつも同じでした。つまり，お客を探す必要はなかったのです。この仕事を1961年まで続けて，仕事をやめました。私は，一度として失業者だったことはなかったのですが，まだ年金は受給しませんでした。まだ，あの頃は，年金をもらう年齢に達していなかったのです。

## 8．両親との親子関係

私は，母よりも，父親との方が，良い関係でした。母は，いつも，わけも聞かずに，すぐ私をぶったのです。しかも，軽くぶつなどというものではな

く，手や，ふとん叩きでもぶちました。家に帰るのが遅くなった時など，その理由も聞いてきれません。まったく大変な母でした。それにたいして，父は理由を聞いてくれましたし，できるだけ私の味方になってくれました。それでも母は，許してくれなくて，よく翌朝になってぶたれたものです。私がやりたいことは，すべてさせてくれたわけではありません。例えば，女友達が外から私に遊びに出ておいでと呼ぶと，母に「外に行ってもいい？」と尋ねます。父には尋ねませんでした。もう一度，「お母さん，少し，外に行ってもいい？」「だめ，だめ。お前は，まだしなければならないことがあるのを，知っているだろうに。だめ。」そこで父が，「外に行ってもいいよ」と言うのです。それでやっと私が外へ出ます。そうすると，翌朝「お前は，ゆうべはよくも」となるわけです。13，4歳の頃は，夏の夕方，少し，外で遊びたがったものです。近所に友達がたくさんいましたから，みんなが窓の下に立って，父から許可が出るまで，私を呼ぶのです。母は，私のすぐ後に男の子たちを生んで，彼らには何でもしてやったのに，私にはその必要がないと思っていたみたいです。母には，ほんの小さい子供の頃から，いつもぶたれていました。20歳の結婚式の前の日に最後の一発をお見舞いされましたが，その後は，もうぶちたくともぶてませんでした。父には，たった一度だけ，お尻を足で蹴られたことがあります。その時は，垣根を飛び越えたのを，彼に見つかったのですが，それでも家の方に行かずに，また垣根の有刺鉄線を足で引き剝がしたのです。彼は，垣根を壊したからではなく，私が強情だったから怒ったのです。その一回きりで，ほかに父に殴られたことはありません。父には，もちろん，叱られたことはありましたが，父は，公正でした。

私の両親の家では，お金のことについて，あけっぴろげに話をしていました。お金がなくなると，いつも母は歌ったものです。そうすると，近所の人達が「あー，ブッセさんの家では，もうお金がなくなってしまったんだ」と言ったものです。母は，「もう1ペニヒのお金もないわ。さて，どうしたものかしら。」「今日は，何を料理しようかしら。」「クルトちゃん，肉屋へ行って，骨を何本かもらっておいで」という具合に，口に出していました。私自身は，

子供にお金のことを話すものではない，と考えていたので，私自身の家庭では，子供の前でお金についての話題は，口に出しませんでした。それに私自身の家庭では，1ペニヒのお金もない，という状況になったことは，ありませんでした。

両親の家では，私たちは，しばしば政治的な教育を受けました。私の両親は，労働組合新聞の『フォルクスフロイント』'*Volksfreund*' を読んでいました。私自身の家庭でも，最初は『フォルクスフロイント』を読んでいましたが，1933年に禁止されるまでです。禁止された後，もう再び発行されませんでした。その後は，『ブラウンシュヴァイガー・プレッセ』"*Braunschweiger Presse*" を読んでいました。

父は，ベーベル *Bebel* を尊敬していました。その他に彼が尊敬した人のことは，もうよく覚えていません。私自身は，20年代から30年代始めにかけて，私が属する社会については知っていましたが，誰が尊敬にあたいする人であるかなど，まったく考えたこともありませんでした。

私の政治的な意識は，両親の家で養われました。何かの政治的な出来事がきっかけとなった，というわけではなくて，父の影響を受けて育ったのです。私は，自分の帰属するところは，労働者の社会だと，今，はっきりと言えます。ひとつには，まず，労働者の生活環境で大きくなったということ。二つ目には，私たちが，今日でもまだ，中産階級に属しているとは認められていない，と私が感じているからです。今日では，技能工は，中産階級に属すとされていますが，1930年以前の労働者は，決して中産階級には属してはいませんでした。この労働者への帰属意識は，子供の頃の記憶を出発点にしています。私たちは，他の子供たちと一緒に，どこかへ出かけることができませんでした。学校の行事などで，一緒に行きたくとも，お金がないから行けないのだということを，はっきりと知っていたのです。労働者の子供は，他の子供たちのような服装ではない，ということも知っていました。私の場合，前掛けは汚さないように，いつも気を付けていなければならなかったのです。前掛けを汚したら，きれいに洗った後，糊を付けたりしなければならないの

で，大変だったのです。今からは，想像もできないでしょうが，8日間，目一杯，同じ前掛けをします。翌週も同じ前掛けです。その次の週，清潔な前掛けを学校用につけて行きます。それまで学校用につけていた前掛けは，今度は家用につけます。私たち女の子は，学校で前掛けをつけるきまりでしたから，学校で前掛けをつけて撮った写真があります。

## 9．結婚

私は，2度結婚しました。最初の夫は，1945年に亡くなりました。1953年に再婚したのです。最初の夫は，1907年2月17日生まれです。彼は，この近郊のシュテックハイムの出身です。夫は，新教の教会に入っていましたが，私たちは教会での結婚式は挙げませんでした。彼は私と結婚した当時は，ただの家具職人でしたが，1937年か38年にマイスターの資格をとりました。ずっと家具職人として働いて，彼が第二次世界大戦の戦争から戻ってきた時に，ここで独立したのです。彼は，良い技術を持った家具職人でした。彼が作った物はすべて，人々にほめられたものです。でも，彼にとって，生きることが，精神的に大変な負担で，当時の状況に折り合いをつけることができず，戦後の1945年10月11日に，首をつって亡くなりました。商売がうまくいかないという理由によるものでは，まったくありませんでした。彼の負担を少なくするために，役所へ行ったり，木材の購入券を手に入れるなどの面倒なことは，私が一手に引き受けていました。

彼は，飢えるのではないかとか，仕事場がうまくいかないのではないか，と心配ばかりして，不安だったのです。この不安感は，軍隊での経験に発したものだったに違いありません。つまり，彼が，従軍業者の車を運転している時に，低空飛行の飛行機に攻撃されて，車と一緒に生き埋めになりました。夫の横の座席に乗っていた同僚は亡くなり，夫は，発見されるまで3日間も，壕の中に横たわっていました。それが，自殺の引き金になったのだと思われます。たぶん，この時から，彼は精神に変調をきたしたのだろう，と彼の兵隊仲間が後に語ってくれました。この時期は，私の生涯で最も大変な時期で

した。仕事場を作り，そしてすべてが建設途上だったのです。そして，あっという間にこういったひび割れができたのですから。これがどんなものだったかを表現することはできないほどに，大変でした。私は，自分を取り戻すために，長い時間を必要としました。それに，私の息子は，当時，もう見習いの仕事に行っていましたが，彼にとっては私よりも大きな打撃で，大変な喪失感を味わったものです。息子は，最初の数年間というもの，まったく父親の墓場には行きませんでした。

舅は，シュテックハイムで製材所の管理人でした。姑は，農業労働者として，ある農家で働いていました。私たちのわずかな土地を整地するために，その農家からいろいろな道具を借りるためにです。私たちは，一週間のうち6日間，毎朝，ここで整地に汗をながしたものですが，土地は義父母のものでした。私たちは，この家を，自分たちの手でここに建てました。私の夫は木工家具職人でしたから，木工仕事はすべて引き受けたのです。ここの木工仕事は，私たちのお金を使って，すべて私の夫がしました。そのおかげで，夫は3人兄弟の長男でしたが，私たちがこの家を相続したのです。でも，ただで貰ったというわけではなくて，夫は，結婚した当時，シュテックハイムの両親の家に住んではいましたが，大変たくさんのお金がかかったのですよ。でも，彼はこの家でそんなに長くは暮らさなかったのです。

私は，1953年4月6日に2番目の夫とシュテックハイムで再婚しました。この夫は，1904年6月18日に，ベルリンで生まれました。教会での結婚式は挙げませんでした。いずれにせよ，2度目の結婚式を教会でする人はいません。そんなことをする人は，ほんのわずかです。この二番目の夫も厳しい，反教会の精神の持ち主で，ビュッシング社の旋盤工でした。

## 10．性・避妊

母は，5回の流産の子を含めて，全部で15人の子供を生みましたが，生き残った子供は5人でした。私の息子が生まれた後に，母の最後のお産がありました。当時は，まだ経口避妊薬などなかったので，子供をたくさん生んだ

のです。当時は子供を生んでも，今のように，産婆に払うお金など，どこからも支払ってもらえませんし，子供が死んでも，埋葬の費用など，全部，自分で払わなければなりませんでした。つまり，子供が産まれても死んでも，余分なお金がかかるわけです。だから，妊娠すると，経済的に，本当に大変でした。両親は，その費用を特別に用意していたというわけではありませんから，しわ寄せは，私たち子供にもかかってきました。

ある時，母が私をわきに呼んで，いろいろなことを教えてくれたことがあります。その時にわかったのですが，彼女が家にあまりいなかったのは，妊娠するのをいつも怖れていたからなのです。妊娠が怖いと言っていました。そのせいで，長女の私がおかげを被って，遊びに出る時は，いつも小さい子を連れていました。避妊の方法を知っていても，本当に，避妊具を買うお金がなかったのです。避妊した方が，安くついたでしょうが，ついつい何をするにもお金が足りなくて，避妊をしなかったのです。

私と最初の夫とは，1年間の婚約期間がありましたが，結婚する3年前に知り合いました。お互いに好き合っていましたし，子供ができたので，結婚しました。私たちは，今のこの家から2軒先の新しく建ったアパートに住みました。私は，私生児ですが，だからといって，私の母が，生まれてくる子供のために結婚をするようにと強制したわけではありません。もちろん，私は私生児を生みたいとは思いませんでしたが，あの頃の私たちは，今どきの人たちのようには賢くなかったのです。私たちは，子供ができたら困ると考えてはいましたが，それでもできてしまったので，どうすることもできませんでした。

両親とは，性について，一度として話し合ったことはありません。私は，母に性について尋ねる勇気がなくて，何も知らずにいたのです。誰かが来ると，「追い返してしまいなさい。」というわけです。もちろん，母が結婚前に子供を生んでしまったという経験からでしょう。誰かと出かける時には，「お前が出かけたときのままで，戻って来るんだよ。そうでなけりゃあ，お仕置きだからね」と脅されました。最初は，それが何を意味するのかは分かりま

せんでした。でも，後で最初の夫と仲良くなって，分かりました。

性については，弟たちが家で生まれましたから，何となく知ってはいました。12歳の頃，女の友だち同士で，お互いに性について知っていることを，話し合いました。でも，男の子とは，話しませんでした。初めて男の子とキスをしたのは，16歳か17歳でしたが，キスをすると子供ができると思って，不安でした。最初のキスの相手は，最初の夫ではありません。男の子と仲良くなってもよいけれど，母が怖くて，それを家で話せませんでした。母は，いつも外に出てきて，私たちをぶったものです。しかも，ある時，私が家の前で男の子と立ち話をしていただけなのですが，パシッ，パシッときました。彼も私も数回，ぶたれました。私たちは，話をしていただけなのに，「どうしてぶたれるのか，お前は，良ーく知ってるはずだよ。この家の前で，いちゃいちゃしちゃあいけないってことを。まったく，何てことをしてくれるんだい」と母は言って，その後が大変でした。母は，私に「私は，お前を大変なことから守るためにしたんだよ」と言いました。多分，母は，私が自分と同じように結婚前に子供を生んでしまうことになっては大変だと思ったのでしょう。でも，同じ事を私もしてしまいました。私も結婚前に始めたのですから。その時，私は19歳でした。相手は，私の最初の夫でした。私たちは，避妊はしませんでした。結婚してからは，避妊もしましたが，間もなく，手術を受けたので，もう子供のできる心配もなく，避妊の必要がありませんでした。当時は，コンドームが避妊に使われていました。避妊具についての知識は，何でも話し合える仕事仲間の女友達に教えてもらったので，結婚した時には避妊の知識はありました。

堕胎については，いつも「ちょっと，あの娘がねー，……」という形で，近所の娘のだれかが妊娠したという話を聞いたものです。それが，その後，その娘が出産もせず，普通に生活しているのを見て，「あー，そうだったのか」と分かるわけです。でも，誰が堕胎の手術を施したのかは，知りません。私は，ヤミ堕胎手術をする，ある女の人を知っていました。彼女は，お城の前の，今，観光案内所が入っている建物の中に住んでいました。彼女も，罰を

科されたことがあります。この女の人は，この近隣では，ヤミ堕胎師ということで有名でした。彼女のことは，私の結婚後，かなりたってから知りました。私自身が，子供をたくさん持ちたくない，子供はできるだけ少なく，と思っていたので，私がその立場になったとしたら，私だって堕胎してもらっただろうと思います。だから，堕胎に対する罰を科すべきではない，と思いました。子供を持つことに責任をもてる状況でなければ，できるだけ出産を避けるべきだというのが，私の意見です。当時もそう考えていました。私の両親も同じように考えていました。このことについて，弟たちと話し合ったことはありません。私は，29年に結婚して家を出て，彼らは青少年時代を家で過ごしていたので，そういう事についてまで話す機会は，あまりなかったのです。学校では，性にかんする啓蒙の授業は，ありませんでした。私は学校が大好きでしたが，先生たちは厳しくて，性に関することなどは，教えてくれませんでした。

## 11. 宗教・政党・労働組合

### 教会

私の父は，無宗教の人です。私が，教会から脱退したのは，1920年か21年，12歳の頃です。子供だったので，父の意思によるものです。学校では，「宗教」の代わりに，「生活科」*Lebenskunde* の授業を受けていました。「堅信礼」は受けていません。子供たちは，みんな脱退したのですが，下の弟たち二人は，後にまた教会に戻っています。当時，仕事がなくて大変な時代でしたから，教会にも入らず，堅信礼も受けていない者なんて，見習いの職を見つけることができなかったからです。弟たちが教会に戻ったのは，1922年か23年頃でした。でも，堅信礼を受けていないので，見習いの職はありませんでした。これには，とても困りました。そこで，父は，私たちの従兄弟の一人を教会につれて行きました。私たちは，みな洗礼は受けていたのですが，この1910年生まれの従兄弟の場合は，彼が14歳の時，1924年に，父が教会で洗礼を受けさせました。

ある時，父は気違いじみたことに熱中しました。つまり，彼は本当にイエスが存在したのか，聖書に書かれていることが本当かどうかを知りたかったのです。そして，キリストが最初の社会民主主義者である，と確認したと言うのです。彼は，研究するために，様々な宗派を訪ね歩きました。最後に行き着いたのが，使徒伝道会派でしたが，彼が信心深かったからというわけではなくて，イエスが本当に存在したのか，書かれていることが本当かどうかを知りたかったからなのです。それは，まあ彼の趣味でした。

クプファーヴェーテの私たちの家の向かいの家族が，使徒伝道会教会の信者だったのです。この家族は，いつも父に「あなたも私たちと一緒にいらっしゃい。教会では日曜毎に遠足や何かの催し物をしたり，とても楽しいですよ。」と誘ったのです。それで，父は教会へ行きました。彼は，「あの教会は，素晴らしいブラスバンドをもっている」と，感激して家に帰ってきました。私たちもその教会へ行きました。父ひとりでは子供の面倒を見きれないので，父は，もちろん，母も連れていきました。その年の復活祭に，私たちは，その使徒伝道会派教会の信者の家に招かれて，皆，そこに閉じこめられました。その時が私たちの二回目の洗礼だったのです。私達子供は，毎日曜日の昼食後は，教会へ行かなければなりませんでした。

その後，ある時，幹部使徒がやってきて，その隣に一人の婦人が座り，彼女が「幹部使徒の回りに後光がさしているのが見えませんか」と言ったのです。そこで，父は，この婦人は狂っている，こんなことを一緒にやってはいられないと考えて，又，この教会を脱退しました。今になって想い出してみると，おもしろい事に，父は，かなり長い間，脱退するまで約2年間，教会に通いました。でも，その間中も彼は社民主義者であることをやめたわけではないのです。彼は，イエスが本当に存在したのかどうかを知りたかっただけなのです。そして，おもしろいことに，いつも「イエスは存在していたし，彼は最初の社民主義者だった」と語ったものです。

**労働組合・政党**

私は，ドイツ金属労働者連盟 *Deutscher Metallarbeiterverband* に入ってい

ました。家事見習いの時は，まだ入っていませんが，ブラウンシュヴァイク・ブリキ会社からビュッシング社に移った時には組合員だったので，1926年には組合員になっていました。工場の仕事をやめる時に，労働組合も脱退しました。社会民主党 *SPD* の党員にもなりました。結婚している時だったので，1930年の初めに入党したのだと思います。自由体操協会や，合唱協会や，演劇協会や郵便鳩協会などの余暇活動の団体のどれにも，入っていません。いつも，余分なお金をとっておかなければならないと思っていたからです。婦人組織にも入ってはいませんでした。家事見習いの協会のようなものも，当時はありませんでした。そのようなものがあったとしても，雇い主たちがそれを知ったら，不機嫌になったことでしょう。労働組合では，ただの一組合員で，役員はしていませんでした。労働組合に入った理由は，それが正しいと思ったからです。誰かに影響されたからというわけではなく，私は労働者の家庭の出身で，父は生粋の社民党員でしたし，彼は「働くなら，組合員でなければならない」と言っていました。つまり，「お前は労働組合に入らなければならない」ということです。だから，私の政治的な意識は，何かの政治的な出来事がきっかけとなった，というわけではなくて，父の影響を受けて育った，両親の家で養われたのです。

SPDに入党した直接の理由は，夫がすでに入党していましたし，私自身も，ヒットラーに政権をとらせないように何かしなければならない，と考えたからです。残念ながら，ヒットラーが政権をとりましたが，私は，ここのシュテックハイムで，「鉄の前線」'*Eiserne Front*'を一緒に創設しました。それは簡単なことではなく，町とはちがって，この村ですから，もう大変でした。私たちは，何をしたいのかという本音を吐くことはできませんでしたし，いろいろな活動の内容をすべて，少しづつ隠蔽しなければなりませんでした。「鉄の前線」を創設したのは，ヒットラーが政権をとる直前ですから，1932年頃です。その当時，ここではクラッゲス *Klagges* が，権力の座についていました。彼は，45年に戦犯として，他の戦争犯罪人と一緒に処刑されるべきでした。もう生かしておくべきではなかった。彼が行ったことといったら，酷

いものでした。誰も，そん酷いことを言葉に出して語ることができないし，考えられないようなことをしたのです。それにもかかわらず，彼は年金をもらっているのです。彼は，人々を死ぬほど苦しめて，彼のせいで，人民戦線会館の窓から身を投げた者もいるのです。労働組合新聞の編集者のティーレマン *Thielemann* という男です。そんな酷いことをした男が年金を受けているなんて，そんなことがあってはならないのですよ。まったく，軽蔑してしまいます。その他にも，多くの人々が被害を受けました。このクラッゲスの指図で，看護婦たちは，病人たちの傷が，もっと痛むように，コショーと塩を擦り込んでいたのです。彼は，刑務所から出すべきでなかったのです。私の叔母のひとりが，労働組合会館の斜め前に住んでいました。彼女は，叫び声や大騒ぎのせいで，一週間も眠れなかったので，私たちの家に来て，泊まりました。そこで，何があったかは，大体，想像できるでしょう。まったく言葉で語れないようなことが起きていたのです。私の現在の夫の同僚は，そこで腎臓から出血するほど，殴られました。残念ながら，「鉄の前線」は助けになりませんでした。

私達が結婚した時期に，最初の夫は，もうSPDの党員でした。入党の時期は，大体，私と同じですが，数週間のずれがあります。夫は，木工労働者連盟 *Holzarbeiterverband* に入っていましたが，見習い期間中は労働組合に加入できませんから，多分，見習いを終えた直後に加入したのだと思います。

## 12．祝い事・余暇

### 祝い事

1930年までは，クリスマスが，一番大きな祝い事で，私の子供時代を通じて，一番すてきなお祝い事でした。つまり，私たち子供は皆，欲しい物をプレゼントしてもらったのです。見習い時代を通しても，大人になってからも，クリスマスは，やはり一番すてきなお祝い事でした。両親は，子供たちに差をつけたりしないので，どの子も同じ位の価値の物をもらいました。子供たちは皆，平等に扱われたのです。私達は，復活祭のお祝いの卵も，皆同じ数

だけ，もらいました。大晦日もお祝いしました。今の子供たちは，誕生日に子供のパーティをしますし，私も，結婚してからは，ゆとりもできたので，誕生日も祝いました。でも，私の両親の家では，子供たちの誕生日のお祝い事はしませんでした。

私の学校時代の最後の年のことですが，「お前は堅信礼を受けるつもりか」と聞かれ，とてもきれいな針箱をもらいました。その中には，素敵な物がたくさん入っていました。そこで，私が泣くと，父が「どうして泣くんだい。これで不満なのか」と尋ねたので，「ううん，もし，今，堅信礼を受けたら，もうプレゼントがもらえなくなるから」と言ったものです。実際に，そう思ったのですが，まだその後もプレゼントはもらえました。でも，私は，堅信礼の代わりに，1924年の復活祭に，15歳で青年式をしました。私の上のふたりの弟のハンスとクルトも青年式をしました。下の弟のヴァルデマーとハインツのふたりは，堅信礼を受けるために，又，教会に入りました。

昔は，母の日のお祝いは，ありませんでした。30年代になって，母の日を祝う習慣ができたのです。商売人が，物を売ろうとして，母の日を発明したのですよ。カーニバルは，そんなに重要ではありませんでした。どこかで友達が仮装パーティをするというので，それに招ばれた時には，一緒に楽しみました。今のような大がかりなカーニバルのお祭りパーティはありませんでした。ただ仮装を楽しんだだけです。夜中の12時に仮装のお面を取りはずします。そうすると，それぞれの正体が分かるというものです。

メーデーには，ここのシュテックハイムから，私たちは，いつもリヤカーにビールの樽を積んで，森に引いていったものです。森で，素晴らしいメーデーのお祭りを祝いました。家族もみんな一緒に行って，楽しみました。それがメーデーのお祭りだったのです。その他の党のお祭りは，昔はありませんでした。

**余暇**

父は，いつも仕事をしていましたが，余暇を見つけては，工作を楽しみました。男の子たちのクリスマスの贈り物用に，いろいろな物をたくさん作り

ました。居酒屋などに行く経済的な余裕はないので，母と一緒によく親戚も訪ねたものです。彼は，とても動物が好きでした。庭で豚や兎に餌をやっていました。ある時，兎の耳におデキができて，彼は，耳をカミモール茶で手当てして，包帯を巻きました。そうしたら，その兎がいつも父の後をついて歩き，家の中にまで一緒についてきたのです。後に，父は，この兎を屠殺することができず，だれかにあげてしまいました。とても動物好きだったのです。

母は，いつも衣服の繕い物とか，することが山ほどあったので，本当の意味での余暇というものはありませんでしたが，夜，親戚を訪問することが，かろうじて彼女の余暇の楽しみでした。でも，両親は，人生を楽しむ人たちだったので，私たちの家にもしばしば兄弟姉妹や従兄弟・従姉妹，仕事仲間が訪ねてきました。そういう時には，ふんだんに食べ物が振る舞われて，その後は，いつもよりもさらに切り詰めた食事にはなりましたが，どうにかして，振る舞うだけのお金を工面していたのでしょう。

私たちは，夏には家族で遠足をしました。日曜に天気が良いと，午前中だけですが，父は，しばしば，私たちを遠足に連れていってくれたのです。父は手すり付きの荷車を持っていましたが，朝，その中に下のふたりの弟を乗せて，上のふたりの弟が，それを引きました。私たちは，山歩きの唄 *Wanderlieder* を歌いながら，歩きました。母は，昼食用のサンドイッチを作ってくれましたが，家に残りました。午前中だけでしたが，私たちにとっては，一番素敵なことだったので，いつも，空を見上げては，雨が降らないように，雨が降らないようにと祈ったものです。遠足に行くと，レモネードを一杯飲ませてもらいましたが，これも特別の楽しみでした。ある時，午後に，母も一緒にヌスベルク（山）へ遠足に行った時は，そこに「ここで，家族がセルフ・サービスでコーヒーをいれることができます！」という大きな看板がかかっていました。それで，次からはコーヒーの粉を持参し，10ペニヒかいくらか払って，ポットも借りて，お湯をもらい，コーヒーを作りました。コーヒーの粉といっても，本物のコーヒーの粉は高いので，チコリの代用品の粉を混

ぜたもので，チコリがほとんどといってよい代物でした。

子供の頃の両親の家では，よく家族みんなで歌いました。父がよく「さあ，歌おう」と号令をかけると，歌い始めるのです。当時，今ではだれも知らないような唄も含めて，民謡から流行歌まで，きれいな唄なら何でも，少なくとも120曲から150曲のレパートリーの唄を歌いました。クリスマスの唄も，歌詞を変えて歌いました。つまり，イエスがどうのこうのという部分です。例えば，「聖夜」の歌詞は，「静かな夜，聖なる夜。みんな寝静まっている時に，坑夫がひとり寂しく坑道で目覚めている」というようにです。レフレインをもう想い出すことはできなせんが，とてもきれいな唄でした。「自由のために」のような労働者の唄 *Arbeiterlieder* や，フランス人が歌う「ラ・マルセイエーズ」なども歌いましたが，大抵は政治組織のお祭りやメーデーの時でした。

20年代に働いていた当時，私は山歩きのクラブに参加し，ハルツ地方の山々を歩き回りました。ここのヌスベルクなどにもいつも行きました。いつも同じクラブの仲間たちと一緒に，戸外にいたものです。私たちは，円座になって，だれかがときどきハーモニカを吹きました。このクラブには，マンドリンを弾く仲間が何人か，ギターやバイオリン，それにバラライカを弾く人もいました。ハイノ・ザムゼは，バラライカを持っていました。この時期が，私の生涯最高の時代でした。この山歩きのクラブには，1925年頃から1929年に結婚するまで，入っていました。

夫と知り合った時，夫は，もうシュテックハイムの自転車愛好家協会「連帯」の会員でした。だから，「ちょっと，君も練習してみなさい。そんなに難しくないから」と彼が言うので，私も試してみたら，乗れたのです。そういうわけで，私も入会しました。入会当時，私はまだブラウンシュヴァイクに住んでいたので，いつも自転車に乗るために，シュテックハイムまで来たものです。私たちは，1927年には，もうこの協会の会員になっていましたが，後に，この協会は強制的に解散させられました。私たちの，自転車愛好家中央会館がオッフェンバッハにあり，そこに店も修理工場もあったのですが，

今は，もうその会館もありません。全部，接収されて，再び戻ってはきませんでした。私たちは戦後，もう一度，まだどうにか残っている自転車をかき集め，修理して，ある程度は活動していましたが，若者がいなくなって，自然消滅しました。最初の夫と結婚していた30年代には，自転車で，日曜毎に，ずいぶん，あちこち走り回ったものです。いつもブラウンシュヴァイク近郊のリヒテンベルク（山）やアッツェ（山）などの森へ行きました。ここら辺には，とても良い自転車専用の道路があったのです。この道路を使うためには，自転車に自転車連合会のステッカーを貼っていました。つまり，1年間分の会費を払うと，ステッカーをもらいます。その会費で自転車専用道路が整備されたのです。この自転車道路はとてもすばらしいものでしたから，遠出できないときには，午後に，このすぐ近くのリッヒレーマー・ホルツからマッシェローダー・ホルツ，ザルツダールム，ブルクホルストまで抜けて行きました。回りにたくさん森があって，森から森へと，自転車道路があったのです。私たちの息子を自転車の前に乗せて，男も女も一緒に，会の仲間たちと一緒でした。

夫は，その他にここのシュテックハイムの「アイニッヒカイト」“*Einigkeit*”という名前の労働者の合唱協会に入っていました。

両親は，居酒屋に行きませんでしたし，私も居酒屋やレストランへは行きませんでした。でも，何か特別のことがあると，私は夫とダンスをしにレストランへ行きました。そういう時は，「ホーフイェーガー」へ行ったものです。春やメーデーのお祭りの時に，ダンスをしに行ったのです。「ホーフイェーガー」は，大きなホールで，ヴォルフェンビュットラー通りにありました。今，タクシー・センターがある所です。